

C.J.L.アルムクヴィスト研究序説
—ある古典作家の肖像，および現代に読み継ぐ *Det går an*—

スウェーデン語専攻 大鋸瑞穂

目次

1. はじめに
 - 1.1. アルムクヴィスト研究の今日的意義
 - 1.2. 論文要旨
 2. 作家紹介 その代表作と生涯
 - 2.1. 生い立ち～学生時代
 - 2.2. 社会活動と『アモリーナ』 *Amorina*
 - 2.3. 教育者として—『野ばらの書』 *Törnrosens bok*
 - 2.4. ジャーナリズムと『うまく行く』 *Det går an*
 - 2.5. 亡命と死後，再発見まで
 3. 作品紹介『うまく行く』 *Det går an*(1839)
 - 3.1. 作品概要
 - 3.2. 作品あらすじ
 - 3.3. 登場人物素描
 - 3.3.1. Sara Videbeck(サーラ・ヴィーデベック)
 - 3.3.2. Albert(アルベルト)
 - 3.4. *Det-går-an-striden* (『うまく行く』のか論争)
 4. まとめ
- 使用テキスト
参考文献

要約

カール・ヨナス・ローヴェ・アルムクヴィスト(Carl Jonas Love Almqvist, 1793-1866)は 19 世紀スウェーデンのロマン主義からリアリズムへの移行期において活躍した作家、詩人および作曲家である。彼は詩や戯曲、小説などの文芸作品のみならず、教科書やあらゆる分野における論文等を含む数多くの著作を残しており、小学校の校長やジャーナリスト、牧師としての経歴を持つ、スウェーデン文学史上、最も多才な作家として世に知られる人物である。

スウェーデン国内の文学研究において、アルムクヴィストは文学史内における重要な作家の一人として認知され、彼の作品に関しては既に数多くの先行研究が存在している。加えて彼の作品は古典ながら、舞台化や若者向け翻案等を通して現代の人々にも受け入れられてきた。しかしスウェーデンにおける彼の作家としての評価とは裏腹に、現在日本では彼の名はほとんど知られていない。昭和初期の北欧文学研究でアルムクヴィストが日本に初めて紹介されて以来、作品の邦訳は一作も出ておらず、彼について言及がなされている日本語での文献もごく僅かである。したがってアルムクヴィストは、日本の北欧文学研究の場において今や殆ど忘れ去られている作家であると言える。

よって本稿では、スウェーデン国内と日本における、アルムクヴィストという作家あるいはスウェーデン文学史そのものに対する認識の差異に問題意識を持ち、その懸隔を解消するために、先ずは日本でアルムクヴィストへの関心呼び起こし、これまでのスウェーデン文学への見方を新たにすることを主たる目的としている。

また今回それは二種類のアプローチによって行われる。一つ目は、最新の研究から精査された資料に基づいて、彼の作家としての情報を整理することである。本稿ではとりわけスウェーデンの文学研究者 Johan Svedjedal 氏によるアルムクヴィスト評伝三部作及び活動経歴概略に依拠して、彼の作家人生やその代表的な作品の紹介を行う。二つ目は、彼の著作の中から特定の一作を取り上げて分析し、その作家性を紐解いていくことである。本稿では、現在アルムクヴィストの代表作と名高く、彼が先駆的なフェミニスト作家であると評される所以となった小説『うまく行く』*Det går an*(1839)と、その出版を発端として当時の文学界に沸き起こった一連の倫理論争、*Det-går-an-striden* (『うまく行く』のか論争)を扱い、その分析と考察を通してアルムクヴィスト作品への理解を深めていくこととする。

そのため本論は大きく分けて二つの章から成っている。第一にアルムクヴィ

ストの生涯を彼の作家活動において重要な出来事や作品と共にまとめた「作家紹介」の章、第二に小説『うまく行く』の分析と『うまく行く』のか論争の顛末を記した「作品紹介」の章である。

「作家紹介」では彼の作家人生を五つの局面に分けて、それぞれの時期の作品の特徴を見ていく。全体を通して、アルムクヴィストの作品は同時代のロマン主義作品とは一線を画する独創性を備えていたが、むしろ彼にとってロマン主義とリアリズム、あるいは物語と政治、哲学といったものの間に境界は無く、彼自身が文学というものを通して当時のあらゆる学問、あらゆる思想を繋げていく存在として機能していたと言えた。

次章で紹介する小説『うまく行く』は、結婚制度に対する急進的な主張や女性の経済的自立の必要性を説く内容が世間を騒がせたことで論争を引き起こし、アルムクヴィストが職を追われ、作家として失墜する原因にもなった作品である。本稿では物語の中心人物 Sara と Albert に焦点を当てたテキスト分析を行い、アルムクヴィストが現実の社会問題に根差した視点から、当代における自由主義的理想郷を描こうと試みたことを明らかにする。また彼は作品内で女性の社会的地位の低さと、それにまつわる男女の社会的不平等について言及したが、それらは本作の模倣作品群という形をとって、男女双方による一連の否定的な反応を生み出した。そのことから彼の作品が当時の社会の世相を映し出す鏡として、現代まで大きな意味を持っていた点が窺えた。

アルムクヴィストの作品は幻想的で理想主義的なロマン主義の傾向に沿いながらも、同時に現実に即した社会と当時の時代精神を反映しており、彼にとって物語を書くことは、まさしくそれらの問題への平和的で創造的な解決法の一つであったと言えた。またその問題意識は我々の生きる現代においても共通して存在しているものであり、その観点からもアルムクヴィストは今の時代において特に注目し得る作家であり、彼に関心を向けることはスウェーデン文学への認識を改めるきっかけにもなり得るだろうと結論付けることが出来た。